

NEWS RELEASE

認定NPO法人 日本胃がん予知・診断・治療研究機構 理事会
事務局 〒108-0072東京都港区白金1-17-2 白金タワーテラス棟609号室
TEL:03-3448-1077 FAX:03-3448-1078 E-Mail:info@gastro-health-now.org

※このリリースは、マスコミ関係の方やがん検診にかかわりのある団体へお送りしております。
※お問い合わせいただく際は、事務員が常駐していないため、勝手ながらメールかFAXにてお願いいたします。

「有効性評価に基づく胃がん検診ガイドライン2013年版・ドラフト」に対する声明文を提出

受診率が上がらない胃がん検診のガイドラインは再考を

私達は、胃がんを予知し、予防していく「感染症としての胃がん」対策を推奨します。

認定NPO法人 日本胃がん予知・診断・治療研究機構理事会は、先日、国立がん研究センター研究開発費「科学的根拠に基づくがん検診法の有効性評価とがん対策計画立案に関する研究」班による「胃がん検診ガイドライン2013年版ドラフト」に対し、パブリックコメントとして以下の3点から、抜本的な再考を求める声明文(添付資料参照)を提出しました。

- ①2013年版ドラフトで証拠として採用された2論文は1990年より開始したもので、現在および将来に当てはめると、ピロリ菌感染頻度などの背景因子(=前提条件)が大きく異なっています。
- ②2005年版ガイドラインでは胃X線検診のみが推奨されましたが、検診で発見される胃がんは、国内の年間発見胃がんの5%未満に過ぎず、有効に機能していません。2013年版ドラフトでは、その事実に関する検証も行われていません。このままその方針を今後継続することは国民にとって不利益となります。
- ③検診受診者や検診に従事する多くの関係者の意見が反映されていません。NPOが実施したアンケート調査などを見ても、2013年版ドラフトで再び推奨されている胃X線検診は、胃がん検診を実施している多くの市区町村や住民が最も望んでいる検査方法ではないと考えられます。

私達NPOが推奨しているのは、「感染症としての胃がん」対策です。

胃がんの原因のほとんどがピロリ菌であることは明らかで、国際的なコンセンサスにもなっています。わが国でも2013年2月21日、ピロリ菌感染胃炎の除菌治療に対して保険が適用されました。私達、今、まさに胃がんを予知し、予防する「感染症としての胃がん」対策を進めていくべき、と考えます。

「感染症としての胃がん」対策

- ①若年者へのピロリ菌検査を早期に行なう
 - ②胃がん多発世代への胃がんリスク検診(ABC検診)を行なう
 - ③ピロリ菌感染者には除菌療法を行ない胃がんリスクを軽減する
 - ④リスクのある人たち(除菌後を含む)には定期的な内視鏡検査を継続し、早期発見を目指していく
- この4つを柱とする対策が、胃がん撲滅への近道と考えます。

私達は、2013年版ガイドラインを作成するにあたり、日本の胃がん対策推進に向けて、厚労省、がん対策推進協議会およびがん検診のあり方委員会等の関係機関での十分な検討もふまえ、これまでの胃がん検診に使われてきた死亡率減少効果のみの評価に終始することなく、「感染症としての胃がん」対策にも留意していただくことを強く望みます。